

## グレアム・グリーンの『権力と栄光』について

On *The Power and the Glory* by Graham Greene

岩 崎 正 也  
Masaya Iwasaki

### 1

グレアム・グリーンは少年期に味わった国境の住人であるという二重意識をモチーフとして創作活動を始めた。したがって小説世界の論理構造が作者の現実認識の論理構造に支えられているとすれば、グリーンが創り出した登場人物は作者の感性と認識の成熟に比例して成長を遂げてきたと言えることができる。

『内なる人』(*The Man Within*, 1929)ではアンドルーズの自我は「物を欲しがる子ども」である自己と「もっと厳しい批評家」である自己とに分裂するが、両者の葛藤は、フランシス・ウィンダムが言うように、「警察による犯人の追跡、欺かれた人々による裏切り者の追跡、迫害者たちによる犠牲者の追跡。これは神による人間の魂つまり内面の自己の追跡を象徴する。人は平和を探し求めているときに追いつめられるが、その平和はしばしば死の中にしか見出されない<sup>(1)</sup>」という点で人と人との間の水平的関係での対立であるとともに神と人との間の垂直的関係での対決でもあるという二重構造をもつ。その二重意識はしだいに変化、発展し、『拳銃売ります』(*A Gun for Sale*, 1936)でグウェン・ボードマンの言うレイヴンの‘lawless’とノトウィッチ市民の‘lawful’とに分解し、『ブライトン・ロック』(*Brighton Rock*, 1938)の中で、アイダのhuman ‘right and wrong’の水平基軸とピンキーのdivine ‘good and evil’の垂直基軸とに二極分化を起して物語の結末に至っても反撥、対立を続ける。この両基軸が初めて融合を示した作品が『権力と栄光』(*The Power and the Glory*, 1940)である。

カトリック教会の礼拝が非合法であるメキシコの地域で、警部はウィスキー司祭を捕えたときに、

憐れみの気持から法に背いて司祭にたいし処刑の前に告解を許し、ブランデーを贈る。司祭は「あなたはいいい方です」と言い、警部は「ほかにおまへにしてやれることはないかね」と尋ねる。この瞬間に両者の関係は、反転し、「追う」警部は水平基軸から垂直基軸に転回した世界の中で神によって捉えられたと言うことができる。

なぜここで司祭と警部の両者が融合したのか、その鍵は31歳のときのリベリア旅行で再生を確信することによって「地獄の存在を信じたから天国の存在を信じるようになった」<sup>(2)</sup>と言うふうに自己の二重意識を統合し始めたグリーンが、それまでの「ラジャ張りのドア」を「国境」のレベルに発展させたメキシコ旅行の体験にあると考えられる。なぜなら『権力と栄光』はボードマンが言う、「ヨーロッパ文明にある世俗的、政治的墮落を扱う物語を通じての」<sup>(3)</sup>『掟なき道』(*The Lawless Roads*, 1939)の小説的再現だからである。

### 2

メキシコでは1911年の革命政権樹立後、国家権力によるカトリック教会にたいする弾圧がたびたびくり返された。1926年にカリェス大統領はあらゆる宗教的表現にたいし迫害を加えるようになった。たとえば、司祭数の制限、外国人司祭による聖務遂行の禁止、私立学校や家庭での宗教的な儀式や教育の禁止などであり、この法律違反は犯罪<sup>(4)</sup>となったので多数の司祭などが殉教した。グレアム・グリーンは『掟なき道』の中で、この状況に触れて、「1931年11月11日から1936年4月28日までの間に480のカトリック教会、学校、孤児院、病院が政府によって閉鎖されたり、他の用途に当

てられたりした<sup>(5)</sup>」と記している。当時の司祭の人数は、『権力と栄光』の舞台となる人口25万のタバスコ州で1人、50万のチアパス州で4人というように減らされた。<sup>(6)</sup>

『権力と栄光』の成立の状況はコレクテッド・エディションの同書と『ブライトン・ロック』のそれぞれの序文の中で詳細に述べられている。それによれば、1937年から1938年にかけての冬のメキシコ旅行の目的は「当時すでに最終段階にあった宗教弾圧の調査<sup>(7)</sup>」をまとめて『掟なき道』に仕上げることにあり、『権力と栄光』を書くことはなかった。だからケネス・アロットとミリアム・ファリスが言うように「もしグリーンがメキシコでタバスコの追われるウィスキー司祭のことを耳にしなかったならば、この小説は書かれなかっただろう<sup>(8)</sup>」。なぜなら『権力と栄光』は司祭の人間と職務の関係を初めからテーマに据えて制作された<sup>(9)</sup>からである。

しかし、書かれた旅行記はメキシコに見られるヨーロッパ文明の頽廃と、ローマ・カトリックの衰弱した信仰と礼拝の状況についての証言を超えたものであり、そこに表れる作者が幼年時代から抱いてきたさまざまな二種の世界を統合する国境の意識の進展を探ることが『権力と栄光』のテーマを解く鍵の1つになると考えられる。ボードマンは「グリーンは『地図のない旅』(*Journey Without Maps*, 1936)の場合よりもはるかに正確に自己の『失われた』少年時代の回想を記している<sup>(10)</sup>」と述べて、メキシコ体験をアフリカ体験の延長線上に置いている。

旅行記は、メキシコの革命政権による禁教の状況を始め、非合法の司祭の活動と礼拝の現実、カトリックである地方の指導者との対談、タバスコとチアパス州での迫害の実態などを含む調査書であるが、次の2つの「国境」の風景が冒頭に飾られている点で、本書もまた『地図のない旅』に劣らず、全篇を貫く作者の一定の視線を読者にたいして意識させる。

- (1) 父の書斎の脇の通路にある緑のラジャ張りのドアを押しあけると、紛らわしいほどよく似ているもう1つの通路に出るのだが、そうはいうものの異国の土地にいるのだ。<sup>(11)</sup>
- (2) ラレドの小屋掛けの両替店で埋めつくされて

いる通りが国境の方へと下っていき、向う側では上りになってメキシコへと連なる。まったく同じなのだが、少しみすばらしい。<sup>(12)</sup>

作者の意識の時間相に従えば、(1)の文章には、13歳のときセント・ジョン寮に入ってから、22歳のときのカトリックへの改宗を経て31歳のアフリカでの再生体験を味わう前までの20年近くにわたる悪の認識の時間が流れ、<sup>(13)</sup>(2)の文章には、再生を果たしたあと2年を経てメキシコへ旅立つ前にアメリカとの国境に佇む34歳のグリーンが家庭と学校との間で味わった暴力と無秩序という悪の認識を、メキシコの革命政権による宗教弾圧と布教活動との間に再確認しようとする時間が流れる。メキシコ体験はアフリカの「原始」へ戻る旅ではなく、子どもの世界の悪が大人の世界にあって継続し、拡大されていることを見る体験であり、失われたローマ・カトリックの信仰を探し求める旅であり、作者自身の生と死、生と再生の二重意識を統合できる国境の意識を獲得するための旅でもあった。

こういう視線に貫かれた『掟なき道』が幼年の「原始」を主張する『地図のない旅』にたいし、大人の「文明」の頽廃を強調している点で、イアン・グレゴールが『自伝』(*A Sort of Life*, 1971)について述べた「自伝を書くということは自己の生涯を形成しなければならないという必然性に従った一種の自己発見<sup>(14)</sup>」であることを持ち出せば、『掟なき道』もまた a sort of fiction であると言うことができる。

### 3

『地図のない旅』の制作意図が、空間的移行に時間的遡行を重ね合わせることによって、ヨーロッパ文明から失われた「原始」の秩序と、大人にとって失われた幼年に共通する innocence を探ることにあるという点でアフリカ行きは13歳のときセント・ジョン寮に入ってから抱き続けた悪の充満する「文明」の秩序からの脱出であった。一方、『掟なき道』がメキシコに見られる文明秩序の頽廃を取材している点で、グリーンはメキシコ体験は、作者の過去にあった悪の認識を現在に再現したも

のであり、山形和美氏の言う「歴史のひとコマへの旅」<sup>(15)</sup>である。

グリーンは次のようなメキシコを支配する廃れた「文明」の秩序を数多く発見する。

- (1) 「教会の外側に市場がある。日没のときには気味の悪い場所になり、西アフリカの未開地で見ただんなものよりも醜悪だ。わずかばかりのジャガイモと大豆、醜い芸術品ふうの形と色をした陶器に籠細工」<sup>(16)</sup>。
- (2) 「反宗教」の秩序と法律の守護者である警官のモラルの低さに驚く。「男たちの動物じみた顔。まるで法秩序というよりも強盗のようだった」<sup>(17)</sup>。
- (3) バレンケへの途上の暑さと荒廃と廃墟に充ちた地域は「死」の風景であった。「この最も奇怪な環境にあっては二、三週間後には生と死の観念にならされてしまう」からである。さらにラバの旅では時刻による時間の測定は意味を失う<sup>(18)</sup>。

それとともに作者は現世の政治的「権力」の秩序の中に見られるカトリックの信仰と礼拝の衰弱した風景を次のように記している。

ラス・カサスのサント・ドミンゴ教会に入ると黒ずんだ18世紀の司祭と聖人の重々しいよじれた金箔を張りつけた肖像が壁に埋めこんであった。それは充足感を与えたがまた指導者が去った集会のように空虚感をもたらしした。それ以上の意味はもたなかった。花を撒き垂れ布を拡げるのはただの感傷となった。ここには聖体はなかった」<sup>(19)</sup>。

「本当の隠れ家は存在しなかった。警察は買収されていたのだと思う。金銭が足りなくなると、ときどきだが、ミサの家宅が襲われ、会衆は罰金をとられ、司祭は保釈金と引き替えに監獄に留置されるのだ」<sup>(20)</sup>。

グリーンはメキシコでいくつかの「国境」の風景に出会う。ヌエヴォ・ラレドに入ると、「橋の向う側」(‘Across the Bridge’ 1938)の中でキャロウェイ氏がリオグランデ河に架かる国境の橋のメ

キシコ側にある小さな町から、対岸のアメリカの町にたいして自分の故郷であるイギリスのノーフォークの存在を夢見ているように、「ロマンティックな人は国境の橋の向う側にいる女性が故郷の女性よりも美しく愛想がいいだろうと信じ、また不運な男は少なくともこちらとは異なった地獄を想像するものである」<sup>(21)</sup>。しかしグリーンが見たヌエヴォ・ラレドはラレドの持つ「文明」の頹廃の再現に過ぎず、グリーンの期待が失望に変わったのは息子であるヌエヴォ・ラレドが「父親より年老いて見え、人生の裏面をずっとよく知っているようだった」<sup>(22)</sup>からである。

グリーンは、警察があらかじめミサの隠れ家を知っていて、ときどき襲って信者から罰金を徴収するという国家「権力」の墮落とそれにたいする恐怖を描いているが、その一方でラス・カサスの写真店の中で会ったキリストの彫像をもつ中年の婦人の敬虔な態度に触発されて作者は自分がカトリック信者であることを告げ、異国の地に失われた信仰を発見したことに感動する<sup>(23)</sup>。

『権力と栄光』はメキシコの激しい信仰弾圧が行われている地域に留まる墮落したウイスキー司祭が自己抑制のいきとどいた高潔な主任警部の追求と闘いながら、洗礼、ミサ、告解などの職務を遂行し、捕えられたときに両者の精神が重なり合う物語である。両者の葛藤は、その無名性のためにそれぞれが所属する国家「権力」の秩序と教会「信仰」の秩序との対決をも表している。ウイスキー司祭は、明らかにメキシコ旅行中、市民から聞かされたチアパスの司祭をモデルとして創られた。

「おお」とその男が言った。「あの人はまさに私たちの言っているウイスキー司祭でしたよ」。男は息子の1人を洗礼に連れて行ったが、司祭は酒に酔っていて子どもにブリギッタという名をつけようとした<sup>(24)</sup>。

一方、「権力」の正義を預かる警部については、頹廃的な警官やピストル刺客の中にモデルを見出すことができないので、「考えられる限り最良の動機から人生を抑制した理想主義的な警部」<sup>(25)</sup>を創り出したという。

貧困の村に生れ育った警部が司祭にたいして激しい憎しみを抱き、逮捕しようと考えたのは、司祭がこの地域の貧困、無知、悩みの元兇と思われたからである。少年期に教会で見た司祭が疲れた農民からセンターボを受け取る代りに何の返礼もしなかったのを見たからである。その信念は子どもへの愛情によって支えられ、その信念を果たすために警部は、独身のまま「監獄か修道院の個室のようにわびしい」部屋で暮らしている。聖人的な警部の信念に比べると、知的ではないが金銭の価値をよく心得た商才をもつ司祭の野心は大きな教区の聖職になることであった。

物語の中で、司祭は2回安全な州外へ脱出する機会を与えられた。その状況は次のようになる。

- (1) ベラ・クルス行きのジェネラル・オブregon号が河港に停泊して積荷をおろしている間、テンチ氏の診察室でブランデーを味わっていた司祭は十分に乗船の意思をもっていたはずである。母親の病気をなおすために6リーグ先から2頭のラバを引いて戸口に現れた少年の嘆願を耳にしながら、一度は「いや、いや。あの船に乗らなくては」と自分に言い聞かせてみたものの、次の瞬間には「通過できない状況にいやいやながら呼び出されたかのように」立ちあがり、「船に乗りおくれるようにできているんだ」と言う。<sup>(26)</sup>
- (2) 山岳地帯を越えてチアパス州に迷いこんだ司祭はルーテル派の信者であるレーア兄妹の農場で保護される。体力を回復した司祭は村の教会でミサを行い、村中から集まってきた信者から告悔を聴く。レーア氏の言う「たいへん道徳的な所」であるラス・カサスヘラバに乗って向おうとしたときに混血児が現れる。混血児の話を書き切りの罫だと覚悟しながらも瀕死のアメリカ人強盗の告悔を聴くために元の道に戻る。「瀕死の男の告解を拒否したことを他のすべてのことと同じく認めなければならなかっただろうと思われる場合には、ラス・カサスでする告悔は実際にはいい夢にはならなかっただろう」というふうに意識したからである。<sup>(27)</sup>

テンチ氏の住む町の河港を入口とする禁教の世界とまともなホテルとダンスホールのある「陽気な町」であるベラ・クルスを玄関口とする信仰の世界がメキシコ湾上の40時間という時間を国境

として対峙する。その国境をジェネラル・オブregon号が貨客をのせて往復する。

物語の第1部第1章の河港に現れた司祭はすでにその死を予言されている。傍観者のテンチ氏の眼を通して「男の黒い眼となで肩は彼に不快にも棺桶を思い出させた。死はすでに男のカリエスにかかった口の中にあった」<sup>(28)</sup>ことが示されているからである。

#### 4

40時間の国境を越えて「信仰」の世界へ脱出することを断念した司祭は、子どもの母親を救うためにラバの背に揺られながら悪の充満する禁教の世界の奥地へ進む。

彼は、これまで脱出しようと努めてきたけれども、西アフリカの一部族の王つまり人民の奴隷に似ていた。その王は風が止んでは困るから寝てもいられないのだ。<sup>(29)</sup>

子どものときから司祭の人と権能との区別を教えこまれてきたグリーンは上の文章の中で司祭職と王権の間にあるアナロジーの存在を提示している。

A. M. ホカートは世界のさまざまな地域の死と再生についての過渡儀礼を調査したが、古代における王の戴冠式の儀礼とキリスト教司祭の聖職授任式の儀礼とを比較することによって王と司祭の間にアナロジーの成立を認めて、「王と司祭が同じ幹を持つ分枝同士であることは明白である」<sup>(30)</sup>と言う。それによると、たとえば次のような儀礼が両者に共通する。

##### 戴冠式<sup>(31)</sup>

・理論では、王は(1)死に、(2)再生する。(3)神として。

##### 聖職授任式<sup>(32)</sup>

・主教の聖職授任式の目的は、戴冠式におけるが如く、ヴェニ・クレアートル（創造者）によって、そして「教会において、主教の役職と仕事のために聖霊を受けるために」両手を置く時に与えられる戒

- 準備段階として、王は断食し、他の禁欲生活を実践する。
- そして塗油式を受ける。
- 他にも王位の徴となる、剣、笏、指輪等を受け取る。

告によって表明されている。

- 断食は聖餐に含まれている。
- 塗油式がある。
- 王位のしるしには、指輪が含まれる。笏杖は笏の代りになっている。

(以下省略)

また、ジェイムズ・G. フレイザーによれば、  
「下ギニアのケープ・パドロン近くのシャーク・ポイントにクルという祭司王が森の中に1人で住む。王は女に触れてはならず、家を離れてもいけない。実際にその椅子を離れることさえできず、そこに腰をおろしたまま眠らなければならない。というのはもし横になって寝ようと風が止んで航海が中止されるからである。」<sup>(33)</sup> という。初期の王国では、王は人民の福祉のために存在していたので、好天と豊作を人民にもたらしたときには、尊崇を受けるが、一旦人民に不利を与えると、王はその座を追われ殺されてしまう。したがって王位に附随する戒律を守ることを拒否してだれも王位に就く希望者がなくなり、必然的に霊的権力と俗的権力が分離し、複数の王が並立するようになったという。<sup>(34)</sup>

このようにして分離した霊的権力と俗的権力の関係はローマ・カトリックでは「秘蹟の有効性は授与者の正統信仰や聖寵の状態如何には依存しない」<sup>(35)</sup>と規定されている。

革命前には、罪を犯さない代りに人を愛することもなかったウイスキー司祭がホセ神父を除いて他の司祭が脱出したあとのタバスコ州に留まったのは、自己に附随する霊的権能に忠実だったからではなく、自分一人でルールを作り出すことができるという自惚れのためであった。そして断食もミサも止め、酔いにまかせて女に子どもをませた司祭の墮落した人間性は権能からますます乖離する。それは自惚れが天使をも墮落させる罪だからである。一方、「権力」の秩序に屈服して結婚の道を選んだホセ神父は、妻からベッドへ誘われるたびに、自己の持つ聖なる権能を憶い出し、絶

望の罪に陥ったことを意識する。司祭が権能と人間性との乖離と、その統合の問題を意識したときに、作者のグリーンはその解決を図る前に自己の上に引き受けた二重意識の区別、つまり創作と信仰との関係を明らかにしておかなければならなかったはずである。

この点に触れてグリーンは「たびたび自分がカトリック作家ではなく、たまたまカトリック信者である作家と宣言しなければならなかった<sup>(36)</sup>」と自己の二種の資格を区別した上で、小説家が負う最低二つの義務は「見た通りの真実を語ること」と「国家から特権を受けとらないこと」だと述べている。さらに、「真実とは正確さのことである」と補足し、国家だけでなく個人として所属する教会社会にたいしても「不忠実であることがわれわれの特権である<sup>(37)</sup>」というふうに信仰から独立した文学の立場を表明したあとで、その根拠としてジョン・ヘンリー・ニューマンの『大学の理念』(The Idea of University, 1873)の一部を引用している。

事柄の本質からすると、文学というものが人間性の研究とされているなら、キリスト教文学というものを持つことはできない。罪びとの罪なき文学というものを試みようとするのは言葉の矛盾である。たいへん偉大で高度なものを集めることはできるかもしれないが、一旦そうなった場合にはそれがまったく文学でないことに気づくだろう。<sup>(38)</sup>

このニューマンの文章と合わせて作家のモラルと信仰の関係については1970年のコレクテッド・エディションの『ブライトン・ロック』の序文の中でもくり返されている。

## 5

自惚れの罪に陥って墮落した司祭は物語の冒頭で河港に現れてから、結末で再び河港に辿り着く。その旅を信仰が失われた悪の世界の中で自己の司祭職としての権能を再確認する旅であると考えることができる点で、リベリアで再生体験<sup>(39)</sup>を得たグリーンがその再生を再確認したメキシコ体験を司祭の旅の上に重ね合わせることができるだろう。

ブランドーを隠し持っていたために赤シャツ党員に追われた司祭は、「脱出したいという意志」の芽生えを意識する。これは彼がそのあとホセ神父の家の中庭に逃げこんだときによみがえってきた「生への欲望」に転化する。司祭が「敵意が周囲に立ちのぼってくる」のを感じた監獄は『掟なき道』の冒頭に置かれた情欲、犯罪、不幸な恋、悪臭に充たされている、ランチャ張りのドアから向う側の学校にある悪の世界を再現し、「恐怖、憎しみ、ある種の無法状態を意識する」という少年グレアムの意識を反映している。司祭は監獄の暗闇の中で予想を裏切って信仰に裏づけられた異常なほどの人への愛情を意識する。「死刑犯引き渡し<sup>(40)</sup>の報償金をだれも欲しがってはいないよ」と声が出したからである。また監獄ではだれもが「外国人であり、容疑者であり、怪しい共犯者のいることがわかっている文字通りの追われる者であった<sup>(41)</sup>」というグリーンを意識したからである。

このようにしてラス・カサスでのグリーン<sup>(42)</sup>の再生意識が司祭の「脱出したいという意志」——「生への欲望」——「仲間意識」に対応する。民俗学上の通過儀礼に従えば、生＝俗と再生＝聖とは非連続の存在であり、その境界にあるのは「死」という存在の位相である。死刑の前日、監獄で自己の頹廃的な生の中に残った聖人になるという最後の希望に到達した司祭が銃殺されて死ぬことによって「信仰」の秩序は「死」の位相に沈む。しかし、「背の高い青白い顔をしたやせた」司祭が河港に現れたときに「信仰」の秩序は「生」から「再生」へと循環し、追跡という目的を失った警部は、「追う」水平基軸から垂直基軸に転回した世界の中で神に捉えられる。これまで警部を崇拝していたルイス少年につばを吐かれることによって神との関係では現実の世界での強者から弱者の位置へと下降するのである。

「信仰」の秩序と「権力」の秩序を象徴する司祭と警部の関係と、ランチャ張りのドアによって隔てられたグリーン<sup>(43)</sup>の二重意識との間にアナロジーを持ちこめば、等しい牽引力を持つ両者を裁断することは困難である。

この点で、「二人の間にある対照が両者に生気を与えている。サンチョがいなければドンキ・ホーテは登場人物の半分でしかなかっただろう」と

グリーンが指摘する対比の関係が司祭と警部の間にも成立する。

## 註

- (1) Francis Wyndham, *Graham Greene* (London: Longmans, Greene & Co., 1955), p. 6.
- (2) Graham Greene, *The Lawless Roads* (1939; rpt. London: The Bodley Head, 1978), pp. 2-3.
- (3) Gwenn R. Boardman, *Graham Greene* (Gainesville: University of Florida Press, 1971), p. 63.
- (4) American Corporation, *Encyclopedia Americana XVIII* (New York: American Corporation, 1964), p. 784.
- (5) Greene, *The Lawless Roads*, p. 68.
- (6) 上智大学編、『カトリック大辞典 第5巻』(富山房、1960), p. 123.
- (7) Graham Greene, introduction, *The Power and the Glory* (1940; rpt. London: The Bodley Head, 1971), vii.
- (8) Kenneth Allott and Miriam Farris, *The Art of Graham Greene* (1951; rpt. New York: Russell & Russell INC, 1963), p. 173.
- (9) Greene, *The Power and the Glory*, ix.
- (10) Boardman, *Graham Greene*, p. 61.
- (11) Greene, *The Lawless Roads*, p. 1.
- (12) *Ibid.*, p. 13.
- (13) 岩崎正也「グレアム・グリーン<sup>(44)</sup>の『地下室』について」(長野大学『長野大学紀要 第34号』、1987), p. 25.
- (14) Ian Gregor, 'A Sort of Fiction,' *New Blackfriars*, 53 (March 1972), pp. 121-122.
- (15) 山形和美『G.グリーン』(冬樹社、1977), p. 124.
- (16) Greene, *The Lawless Roads*, p. 41.
- (17) *Ibid.*, p. 134.
- (18) *Ibid.*, p. 165.
- (19) *Ibid.*, p. 207.
- (20) *Ibid.*, p. 209.
- (21) *Ibid.*, p. 13.
- (22) *Ibid.*, p. 26.
- (23) *Ibid.*, p. 208.

- (24) *Ibid.*, p.141.
- (25) Greene, *The Power and the Glory*, x.
- (26) *Ibid.*, p.13.
- (27) *Ibid.*, p.216.
- (28) *Ibid.*, p.10.
- (29) *Ibid.*, p.17.
- (30) A. M. Hocart, 『王権』,trans. 橋本和也  
(人文書院,1986), p. 158.
- (31) *Ibid.*, p. 88.
- (32) *Ibid.*, p. 157.
- (33) J. G. Frazer, *The Golden Bough* (1922; rpt.  
London: Papermac, 1983), p. 169.
- (34) *Ibid.*, pp. 171-177.
- (35) 上智大学編『カトリック大辞典 第4巻』p. 371.
- (36) Graham Greene, *Brighton Rock* (1938; rpt.  
London: The Bodley Head, 1970), p. vii.
- (37) Elizabeth Bowen, Graham Greene, and V.  
S. Pritchett, *Why do I Write ?* (1948; rpt. The  
Folcroft Press, INC., 1969), p. 31.
- (38) *Ibid.*, p. 32.
- (39) 山形和美『G.グリーン』p. 123.
- (40) Greene, *The Power and the Glory*, p. 153.
- (41) Graham Greene, *A Sort of Life* (London:  
The Bodley Head, 1971), p. 72.